ラブカクテルス　その８７

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス　その８７

【Ｎコード】

Ｎ３８４１Ｆ

【作者名】

風　雷人

【あらすじ】

今宵は天にも昇るような音楽に酔う、そんなカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前はギター少女でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は今日も駅前のロータリーにある歩道橋の上に立っている。
下を覗くとその足元のロータリーには、気味の悪いくらいのタクシーの群れが、まるで大群でプランクトンを狩りしているアジやサンマのようにウヨウヨと、餌場にたかりに来ているようにグルグル回る様子が見えた。
何だかその排気ガスのせいでめまいがしそうだ。
パクリパクリとタクシー魚に食べられていくプランクトンのお客達ときたら、まるで灰色の表情を浮かべて、自らその中へと入っていく。
しかしそのうち、それらは酔いどれたプランクトン達へと変わり、そしてそれは、まるでその姿ときたら嘔吐した物に魚が群がるかの様になるのだ。
そんな光景に私はいつも気分を悪くするが、この場所はその間抜け

な想像で今の世間を笑ってやるのに調度いい、そんな滑稽な水族館なのだった。
そしてそれにだんだんと飽きてくると、私はいつものそのロータリーから、線路上を南北に横断する回廊に上がる階段の最上段に腰を下ろし、しょっていたギターのカバーを開ける。
照明に照らし出されて光る艶は、さっきみたいな腐れた世界をも嘲笑うのではなく、どちらかと言えばその無垢さ故にさらりと笑っている様だ。
茜。
彼女の、ギターの名前だった。
ボディーの色から私がそう呼ぶだけなのだが、きっと彼女はこの名前が気に入っている。
その証拠にこの名前で語り掛けながら音をチューニングすると、驚くほどいい音で歌い出すのだから。
茜はそれほど高く、名の通ったメーカーのギターではなかったが、私にはどんなギターよりも、いや、茜意外は多分弾く事ができないとさえ思える。
なぜなら私は茜意外と音を奏でたことはないし、そのつもりも湧かない。
少しネックが右にねじれている茜は、やはり癖があった。
しかしそれが何だか私には心地よく、そして寧ろそれが弾き安かった。
私の普通より小さな手に、茜はそれを分かってやっているかの様なその癖は、それをワザとしてくれているからだという気がする。
それくらい茜の癖は優しく、温かい。
股の上に茜を乗せて弦を軽く波立たせる。
潤いのある独特なピュアな音色が回廊に響き渡る。
何だか音が出る度にそれに色が付いているようだ。
まさに音色。
そして和音は虹の様に思えるのは自然な事と言える。

私は茜を奏でる度にその私にしか見えない色を楽しむ。
しかし不思議なのは、この場所でないとその色が見えてこない事だった。
まだギターを弾き始めて間もない頃、私は茜に導かれる様にここに来た。
茜はなぜか私にここで弾いて欲しいとせがむ様子だった。
それから週に何度かここでこうして腰を下ろすようになった。
しかしここでの茜の波音は、まるで青く澄みきったその上をサーフィンで滑る様に鮮やかだった。
私は彼女を弾いている時はまるで別の世界、色の草原か、音の海に身を投げ出している。
指は滑らかに音の波のチューブを潜り抜ける。
身体が震えるような穏やかではあるが鋭利な快感が私を支配するのが分かる。
私はやった事などないが、きっと本当のサーフィンも最高の波を捕まえた時には、こんな感覚に襲われるのに違いないと思った。
波のチューブを抜ける時に上を見上げた様子は、薄い海の膜の向こうに同じ色の青い空が見えるのだろう。
その時の気持ちには決して曇りのない青空と同じすがすがしさが感じられない筈がないのだから。
私はそれをイメージしながら茜の海を今夜も滑っていく。
果てがない、まるで大海原の中の様に。

私がそんな茜の海から少し休もうと手を弛めると、少し遠い所で手を叩く音がした。
派手ではないその拍手はラの音だった。
そしてそのラの手の主は男だった。
最近たまに私の、いや茜の演奏を聞きにやってくるその若い男は、見た目が今時の軽さを飾っているような雰囲気だったが、目を見るとしっかりした何かを感じた。

何か、いや誰かを探している、そんな事を思わせる瞳の色。
でも私はその男に気を使う事もなく、また茜を奏でることに夢中になった。
少しスローな、しかしメロディーがしっかりしたその曲はブルースだろうか？
私は独特なそのリズムを刻みながら、どこかで聞いたような憶えがあるその曲を辿る。
茜はその金属でできているとは思えない弦を、まるで甘い味を放つラム酒みたいにブルースを香らせる。
私はそれに酔っていくように指を不規則なリズムに合わせる。
スリリングな賭け引きみたいな凹凸。
しかしギラギラと尖ってはいない不思議な響き。
酔うほどよく回ったところで目を開けたその目の前には、何人かの人達が半円を作るように私を囲っていた。
拍手がさっきよりもまとまった和音で聴こえる。
しかしその中にはラの音はしない。
彼はもう夜の街へと繰り出したのだろうか？
若いサラリーマン風の男性と白いブラウスの似合う女性、白髪の紳士とヤケに大きなカバンを転がしている学生？に見える女の子。
私は一応お辞儀を微かにした。
私を囲う彼らの表情は優しく、ここを少し温かくしてくれている気がする。
そんな空気の中で私は彼らへのお礼というほど大袈裟ではないが、少しウキウキとさせてくれるようなカッティングの効いたノリが良い曲を茜が踊るように弾いた。
弾かれる弦はその上からまるで音符のオタマジャクシを勢いのいいシャボン玉のように、出てははじけ出てははじける。
先程より少し増えたギャラリーはそれに、小刻みなリズムを体で拾うように、手であったり腰であったり、足なんかをカウントしている。

私はそれに乗せられるように茜に素早いリズムを揺する。
茜も満足気にシャッフルスイングを決めながらテンションを上げて、それがエスカレートし、まるで暴走したようにスピードを上げる。
私はありったけの力を左手の指の先に集中して思いのままの高ぶる感情を茜に同調させた。
そして周りからはそのリズムを必死で追いかけてくるような、けたたましいほどの早い手拍子が無数に咲き乱れ、私と茜はそれにまたもや刺激されて走った。
すると茜からはとうとう光の筋が溢れ出て、それは東の空に高く登って行った。
空に映し出された白いまあるいそれはまるで月。
そう、裏の月と言われているそれだった。
私はその月が出たのを確認した訳ではなかったが、そこへ行くための光のチューブが完全に出来上がったところで烈しいチョウキングをした。
その時に味わうエクスタシーと言ったらきっとこの世の中、いや、あの世を含めてもそれ以上のものは私にはないと言えた。
そしてそのハオる残像のような音が鳴り響き渡る中を、集まっていた人達は同じエクスタシーを感じながら裏の月へと吸い込まれて行くのだった。
みんな満足気に旅立つ。
私はそれを最後の一人まで見送ると、少し味わう心地よい脱力感で放心状態になりながらも、茜の捻れたネックに入れていた力をやっと抜きながら、意識が正常になったところで、そっとまだ熱さが残る茜をケースへと収めた。
茜はもう眠ってしまったようだ。
私はその様子を少しクスッと笑いながら、背中の羽根を広げ、裏の月を目指して翔び立った。
とても綺麗に輝いている裏の月へ。

夜の繁華街には、さ迷える魂が驚くほど集まる。
俺は今夜もそんな魂を見つけては、駅前ロータリー上の歩道橋に繋がっている階段上に集まるように促す。
それが死神である俺の仕事だからである。
さ迷える魂達は自分がどうしてそこにいるのか、どこに行きたいのかを知りたくて人の多いこんな場所に集まる。
勿論、普通の人間には見えないのだが、俺は死神だけあってそれが見分けられるのだった。
死んだ身体から脱け出した魂は大概、すぐに裏の月と呼ばれる、あの世の入口へと、まるで日に照らされた水が水蒸気になって上がるように登っていくのだが、何らかの原因で蒸発出来ないような魂がタイミングを逃したようにあの世に上がれなくなる事がある。
その理由は様々で、突然の事故や、不意に訪れた持病による死はその故人自体が死んだことを理解していない。
つまりは死んだ時に、裏の月に照らされているのに気付かずに、あの世に行き損ねる事となるのだ。
そうなると普段の世界では受け入れられないようになってしまった魂は自問自答を繰り返しながらさ迷ようことになる。
あのギターを弾く少女もそうなるところだった。

あの晩に弾き語りを終えて例の場所から引き上げようとした瞬間、調度いいタイミングで駅の改修工事をやっていた屋根の上から鋼材が落ちてきて即死。
俺は一部始終を見ていたのだった。
俺にはその人の死期も当然分かる。
彼女は俺の目の前で逝ってしまったのだから、当然普通は裏の月へ行くように促すのだが、あまりにも彼女と茜と呼ばれるギターの音楽は見事で、度々俺はここに足を運んではその音に癒された。
だから彼女の死期の臭いに気付いたときにはひどくショックを受け

たのは記憶に新しい。
確かに俺、死神は人間の死に悲しみを感じないが、今回は違った。
あの二人の音楽がもう聴けなくなるなんて、俺はなんだか我慢できなかった。
だから俺は空を翔べなくなる替わりに彼女を天使してもらった。
裏の月にさ迷よえる魂をいざなう天使に。

今夜も俺は街に出る前に彼女達の音楽を聴きに例の場所に寄ってみる。
相変わらず見事な音色だ。
俺は軽い拍手をして、また今夜も夜の街に繰り出す事にした。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3841f/

ラブカクテルス　その８７

2011年1月27日12時37分発行